

1984
week-32

Partition Capital
no food, no water
87 - married, 4 children
works in a factory, electrical socket
good hasn't written happiness
in our destinies
poor people - earning + eating
want justice

2005 11th August Parliament Protest
18th August, promises
no compensation, employment, housing
They're living happily.
What good are we?

we won't get justice
nobody else will
precedence
we will keep fighting
our children will fight our
battle.

we'll never forget -
blame on Congress
we'll never get washed.

Rajiv Gandhi had blown us to
bits, so he was too
what goes around, comes
around.
→ Not my mother,
everyone else's mother

先日、シェディプー行き地下鉄の中で、ドアのそばに立っている一人の女の子を見ていた。顔を隅に向け、目をきつく閉じてヘッドフォンで音楽を聴いている。曲が終わると目をあげ、次の曲が始まるとまた目を閉じた。悲しみが一つ、二つと、気づかぬまま互いを求めあうときがある。何故そうなるのか、本人も知らないうちに。[莫大な沈黙がここにはある。莫大な犯罪が実行されてきた。莫大な暴力の歴史に身を浸されてきた。] 同じ日、わたしはラジブ・チョーックに戻らず、ドワールカーへ地下鉄で向かうことにした。冬は終わっていた。よく晴れて、正午には影がほとんど見当たらない。人々は影をまとうことなく、そこを歩いている。この瞬間、この街は心をなくす。ドワールカー行き地下鉄ではこれといったことはなく、太陽は傾き、やがてあちこちに影が生まれる。[写真の中のこの部屋のこの一角、写真の中のこの一枚、不在をあらわすこの遺影、わたしたちを見つめるこの人たち、父に息子に夫に聖者にかけられた花飾り、この耐えがたい沈黙、回りつづける天井のファン、今このとき、壁にかかれた絵、この両手に感じる重み、判読不明の絵、プリント模様、この眠っている正義、この未来のしるし、未来のこの街、この世代、この秘められた悲しみ、果てのない悲哀、この写真の中のこの部屋のこの隅に。] 走る電車から、わたしが写真を撮ることはもうない。この滲む光景を見たいとは思わない。 **プリヤ・セン**



october 2009

バグギ・カウルの家の壁は、孫たちの落書きにおおわれている。壁に掛けられたカウルの夫と息子の写真が、その下の孫たちのいたずら書きと対をなす。バグギは53歳、1984年に夫を亡くした。そして3年前、息子は鎮痛剤を過剰服用して自殺。

1984年のあのとき、友人たちの中に、隠れているべきだったのに逃げ出して殺された人や、目の前で家族が焼き殺された者たちがいた。少なくとも最愛の友を失わなわずにすんだことに、わたしの家族や仲間たちは感謝した。でもあの人たちは地獄の恐怖からも、どん底の悪夢からも逃れられなかった。否定された自らの存在の正当性を必死で探しながら、あるいは不都合になれば、そんなものはもはやないものとして扱い、親切な友だちの家で遠慮しながら暮らした。尊厳を失い(どんな尊厳だ?)、戦時でもないのに(でも誰にとっての戦争か?)。

ニリマ・シイク



殉教記念ミュージアム(ティラク・ビハール)

august 2005

2005年にガウリとわたしは、1984年の虐殺の生存者たちと話すため、デリー周辺地域を旅した。ガウリの撮った忘れがたいポートレートが、インドのニュースマガジン「テヘルカ」に掲載された。次のページの写真は、G.T.ナナバティ委員会の報告に対して判決を下せなかった政府への抗議を、議会に怒りを抱く者たちや抗議する人々の失望を捉えた。しかし事態への認識の低さから、若く一途なシークたちの反応を知らせるものとしてしか受け取られなかった。

デリーの灼熱の夏のさなか、彼らが抗議行動を始めたときまでに、八つの調査委員会が立ち上げられ、ナナバティのものは9番目だった。しかしナナバティは最高裁の裁判官として、「トリロクプリの殺人者」キシヨリ・ラル(1984年のシーク数名の死に至る殺傷で起訴された)の死刑を減刑する二人判事最高裁法廷の一員だった。

判決はこのように言う。「上訴人が関係する時間に、暴徒のせいとされた行為は、組織的な暴力によって行われたとは言い切れない、と思われる。おそらく、われわれが想定できるのは、違法な集会があったという範囲であり、暴徒たちはシークに反感をもつ集団があることを強く知らしめたかったというところまでだ。しかしその計画には、情状酌量の余地として、女子供まで全滅させるべきという考えはなかった」

ナナバティは、委員会が設定される前に、すでに結論を下していた。判決の中で述べられた感傷は、少なくとも非難に値する。BJP(インド人民党)がナナバティを任命したとき、彼がどいう結論を下すかわかっていた。政界の支配層は自らを保護する。議会やインド政府が正気を取りもどすのではという若いシークたちの信頼が、あらかじめ用意されていた茶番劇の最終幕で、彼らにある役割を演じさせてしまった。ハルトーシュ・バル



ナナバティ委員会の報告書に抗議するシーク教徒

人と写真は、周期的に、定まらない先の見えない軌跡が会おう地点でぶつかり、崩壊する。それぞれの未知の旅程が、すべてをかきまぜ溶かし忘れさせてしまう時間の流れの中で、溶けないままに残る。写真の表面の溶けないものが、論争に息を吹き込もうというその意思を保つため、命に大きな力を与える。モニカ・ナルラ



ニルプリート・カウル(当時16歳)は、11月2日、父親が生きたまま火に焼かれるのを見た。そのとき自分も鉄棒で、その暴徒に殴られた。復讐したい思いから、ニルプリートはカリスタン運動に参加、そこの闘志と結婚する。結婚後12日目に、夫は逮捕され、二度と戻ってこなかった。ニルプリートの母も、テロリストをかくまった罪で逮捕された。ニルプリート自身も1988年に逮捕され、1996年に釈放。暴徒を扇動するサジン・クマール(インド国民会議所属の政治家)を見た、とニルプリートは何度も証言した。

彼女はこんな風にして本を読むのだろうか。同じ部屋でいつも？

トランク(スティールの戸棚の上にある)の上の小さなものは、本当に鳥なのか。

なぜこうもわたしはこの写真に惹かれるのか。

わたしの新しい小説「ヘリウム」には、ページいっぱいを占めるこの写真も含めて、48枚のモノクロの写真が入っている。昨日、父にこの写真をキャプションなしで見せた。パハイ・ハウ・レイヒへ。「とてもつつましい家族だ、、、彼女は過去を探しているんだ」 そう父は言った。この写真が残酷な出来事の痕跡を伝えるものとは知らずにそう言ったのだ。キャプションはかえって邪魔になっただろう。交錯する想いの中、父は1984年11月の自分の記憶をよみがえらせた。降り積もる冷たい灰。1984年、この部屋の二つの戸棚は、逃げまどう人を隠しおおせなかった。電話もまた、なんの助けにもならなかった。それはデリーの警官が、残酷な暴徒の行為を促すのに大忙しだったからだ。そのとき、彼女はまだ生まれていなかった。

最初にこの写真を見たとき、わたしは静けさを感じた。静けさが写真全体をおおっていた。しかし、すぐに写真の細部がそれを破った。彼女の耳だ。わたしに目をとめさせた耳、彼女が何度も何度も耳にしたであろう耐えがたい物語の残響を、わたしは聞いた。その同じ耳は、彼女の祖母の声の響きも覚えているだろうと思った。

のちの記憶。心の傷とその変遷がしまわれている混乱の場だ。皮肉なことに、家の外でも、その同じ耳は、そこで起きている恥知らずな不公正を聞いていたに違いない。集団的記憶喪失。

この写真を見るたびに、わたしの目はイヤリングにかき乱される。しかし、これは本当にイヤリングなのか？ おそらくわたしが目にしているのは、ゆっくりと落ちる涙なのだ。それは流れ落ちることを拒んでいる。わたしは彼女のベッドのまわりのすべてのものをリストにしてみた。そのものたちも、また耳なのだ。彼女より長く生き残るだろう。

彼女の読んでいる本はなんだろう。処方された「歴史」を綴ったものでないことを願う。

「なぜ若者たちが、もう葬られた、忘れたほうがいいのか」 インド検閲委員会は、1984年の虐殺を描いたある映画に「A」指定*を付した。しかしそれが、この写真にわたしの胸が突き刺さされる理由ではない。

この部屋の中には、流れる時間の中には、壊されたものがある。そしてそれは続く。ジャスプリート・シング *インド映画では暴力性や性的描写の過度な作品に対して、A(アダルト)指定が付けられる。



タランジート・カウルの祖父、ジーヴェン・シングは1984年11月1日に殺された。「400人から500人もの暴徒がわたしの夫を追ってきた。パンダブ・ナガーにある安全な場所に着く前に、暴徒は夫をナイフで刺し、鉄道に放置して死に至らせた」 タランジートの祖母、サルジットはあられもなく泣きながらそう語った。それ以降、生きることは困難を極めた。「わたしは苦しんで苦しんで生きてきました。でも孫娘には一生懸命勉強してほしい」 そうサルジットは言う。



あなたの送ってくれた写真(前ページ)について書くことは、なんと難しいことか。

わたしが言えるのは次のようなことだ。あの虐殺の日、何がおきたのかわたしは知らないし覚えてもない。でも恐ろしい惨事のすぐあとに、いくつもの話が転がり出た。信じられないような野蛮な話の数々が。個人レベルでは、痛ましく恐ろしい体験をした友だちの話を聞いた。その友は、アマリトサルからデリーに向かう列車の中で、毛布をかぶって、リンチを行う暴徒たちからなんとか逃れ、そのあと車のトランクに隠れて家までたどり着いた。

同じ獰猛さで、残虐行為は2002年、グジャラートでも繰り返された。

未亡人たちの写真を見て、心に浮かんだのは次のような題名だ。「耐えがたい空虚を負う人生」 グレンモハメド・シーク

あの日の午後、それが起きたときのことを覚えている。

11月1日、電話が鳴った。

デリーの街中で暴動が起きている、と母が電話で伝えてきたのだ。

父とわたしは母を連れ戻しに向かった。

道路は荒れ果て、たくさんの男がそこにいた。

シークの寺グルードワラに火が放たれた。

そのまわりには暴徒の男たちがいた。

男たちは大声で互いに向かって叫んでいた。

手首にピカピカの時計をしている者たちがいた。

ランニングシューズをはいている者たちがいた。

髪にオイルを塗っている者たちがいた。

男たちの目は真っ赤だった。

まわりじゅうに埃が舞っていたのを覚えている。

でもわたしたちはそこに長くはいなかった。

アップ(父)はわたしを家に戻すと、今度は一人で出ていった。

アップの目も真っ赤だった。

わたしはテラスに走って行って、そのときには家からも見えていた街の煙をカメラで撮った。

公害に関する学校のプロジェクトのためだった。

母が祖母に父のことを告げているとき、わたしは眠っているふりをしたことを覚えている。

母は父に火が放たれたのを見た。

父は白いたっぷりとしたひげを生やしていた。

父はバスの方に走った。

バスはスピードを緩めなかった。

男たちが父を捉えた。

タイヤを父のからだにはめ、ガソリンをかけ、火を放った。

のちに、わたしは父の夢を見た。

その夜、母といっしょに他の女たちが家にやって来た。

その女たちの家族はボーガルにいた。

家族と連絡がとれなくなっていた。

女たちは祈りつづけていた。

道は人毛でおおわれていた。



トリロクプリ32区の未亡人たち。ナナバティ報告が発表された日の朝。

いたるところに毛髪があった。
ときに食べものの中にも。
しかしパトカ(青少年用ターバン)の痕は消せなかった。
パトカでついた痕を即座に消し去る方法があった。
いや、その方法とはファンデーションを塗ることだった。
道端の床屋は痕をうまく隠せると言って人を呼び込み、でもその分の料金をとった。

ボーガで暴動は始まった。
電話が鳴った。
夫はさよならを言うために電話をしてきた。
建物に火を放たれたのだ。
妻は泣き崩れた。
年配の女たちが妻のまわりを取り囲んだ。
2、3時間後、いい知らせが届いた。
報復が成功し、暴徒たちは散っていった。

男たちが街なかを巡回していたのを覚えている。
バイクに乗って、叫びながら過ぎ去っていった男がいた。
男たちは今度はムスリムに向かっていった。
わたしたちはマットレスの下に隠れた。
ひどく暑かった。

戦車のことを覚えている。
新しい言葉「軍隊の行進」を覚えた。
戦車の口が開き、鉄の棒が飛び出した。
わたしは7歳だった。
1984年、デリーにいた。アヌシャ・リズヴィ



october 2009

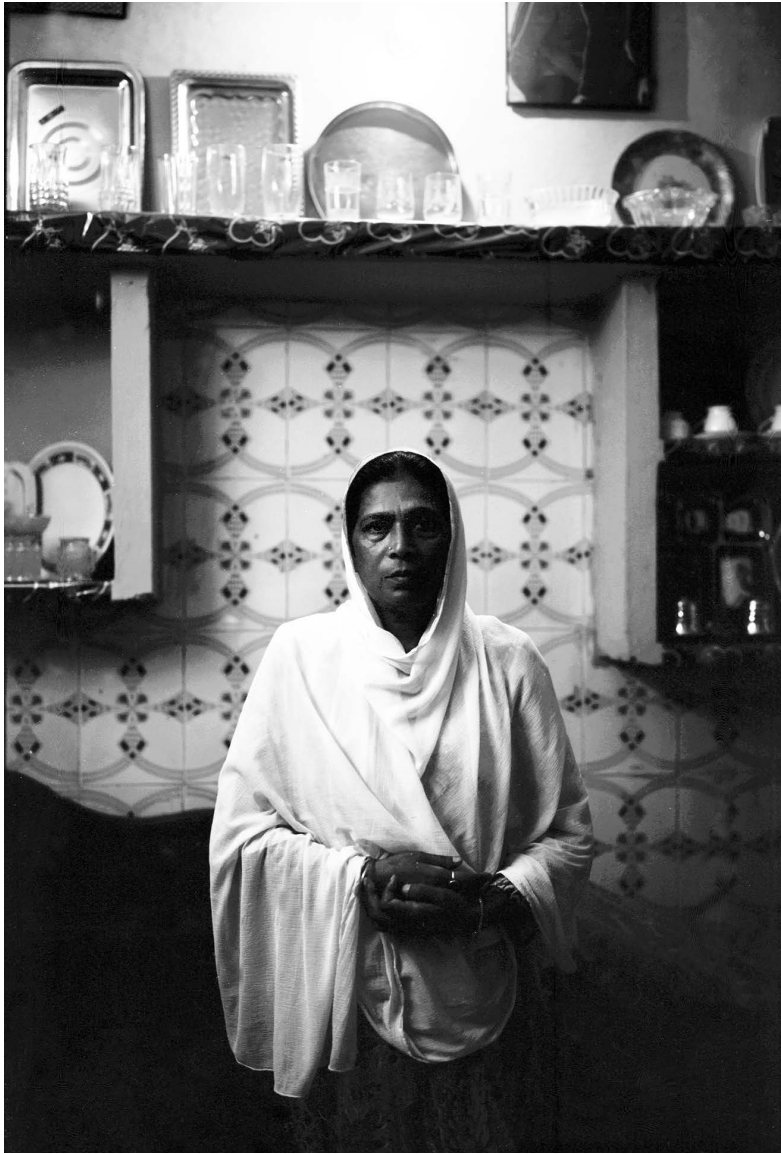
1984年11月1日、ヘルミンダー・カウルの家は、ハルプラサッド・バハルドワージ、P.ティワリ、ジャグディーシュ・ギリに先導された暴徒に襲われた。暴徒はヘルミンダーの夫(19ページの写真)、ニランジャン・シング巡査を含めた家族三人にリンチを加え、殺した。高等裁判所の判事は2007年3月、被告に有罪を言い渡した。

『毎週日曜の朝、祖父と孫息子は、週一の買い物をしに市場に行った。それは家族の儀式で、孫息子は好きでそうしているわけではなかった。毎週日曜の朝は、なだめすかしや脅しや大声に満たされたお茶の間ドラマの一シーンのようだった。祖父をともなつて孫息子が出かけることは、長い間に、家族の儀式となっていた。その日曜日、祖父は家族のマハーバーラタ(聖典)とも言えるこの儀式に終止符を打つ決心をした。彼は年をとり、この家の家長として、控えめな役割に身を転じようとしていた。老いた者たちはこのような道をゆき、その逆にはならない。祖父は息子の妻にお茶を入れてくれるよう頼み、冬になるといつも置かれるテラスのアームチェアでゆっくりとくつろいだ。それは気持ちのいい清々しい冬の朝で、穏やかな日の光がたつぷりとテラスに降り注いでいた。このような冬の朝を、市民は深く愛していた。一年のほとんどを暑さに耐えて暮らしていたから。それは人々が一年の間、待ち望んでいたような朝だった。そのような朝が、熱射にさらされ、蒸し蒸しとして埃っぽい他の季節をなんとか耐えられるものにしていて。息子が父に、湯気のたちのぼる一杯の茶をもってきた。そして父のアームチェアの隣りに置かれた、プラスチックの白い椅子に腰掛けた。近隣で起きていることや最近の物価の上昇についておしゃべりをした。しばらくして、孫息子がテラスに顔を見せた。ティーンエイジャーの無頓着さで、孫息子は父と祖父に週末の買い物にはいつ行くのかと訊いた。午後に友だちの誕生パーティーがあるので、急いで行ってこれないかと思ったのだ。祖父はそれを聞いて喜んだが、表には出さなかった。祖父は息子としばらく話をつづけ、やっと市場に行く準備をはじめた。孫息子は父と祖父に同行することにした。階段を降りながら、どの買い物袋をもっていくか、何を買って何は買わないかの話し合いを少しの間した。祖父は誇らしい気持ちで胸をいっぱいにしていて。生活とはこんな風にあるべきだと感じていた。と、そのとき、玄関の扉を激しくたたく音を耳にした。

三人はこの街の住人だった。三人は死の国の住人となるには早すぎたが、無理やりそこに連れていかれた。三人はその冬の朝、市場にいっしょに行くことは叶わなかった』 スブスリ・クリシュナン



ヘルミンダーは言う。「22年の間、夫に公正な判決が得られるよう闘って、カルカードウマ裁判所に一人で通いました。議会指導部のHKLバガットに対する不利な証言もしました。彼が無罪放免になったとはいえ、うちの三人が見返りを得たことを喜んでいます」 1984年の被害者の中で、長い間ねばり強く法廷で闘ってきた少数派として、彼女はこう付け加えた。「善によってもたらされる真実は、神聖なものです。裁判所は最後にはそのことがわかったはず。わたしの奮闘がその良い例になることを望んでいます」



ダルシヤン・カウル、自宅にて

ダルシャン・カウルは、HKLバガット(デリーの市長を務めたこともある政治家)が、トリロクプリの街にクリーム色の乗用車で乗りつけ、集まった群衆に向けて「大きな木が倒れれば、この地は揺れる」と語り、「サルダル(指導者)の子どもは一人として生き残れない」と言ったのを目撃し、それを証言をした。

のちにダルシャン・カウルは、家にやって来た役人に、25,000,000ルピーをテーブルに置かれ、証言を撤回するよう言われた。ダルシャンはこれを拒否し、「12人のわたしの家族の中の、失くした一人でも返してくれれば、申し出を検討しますよ」と返した。

「政府は何も言ってこなかった。5000人ものシークが殺されました。なぜです？ やつらは死んだ者をトラックに積んで、丘の上で捨てたんです。ある政党が殺し、もう一つの政党がそれを称賛しました」 ダルシャンの生活は一変し、「わたしは働かねばならなくなり、子どもたちの世話ができなくなりました。三人のうち二人の息子は、今無職です。デルシャッド・ガーデンにあるグル・テシ・バハードル病院で仕事を得ました。家を朝5時に出て、病院には8時に着きます。ときに夜勤にもつきました。何年かして、病院は近所の診療所の仕事をくれました。それで今は、朝8時から午後2時までそこで働いています」

「生きる希望なくやってきました。ずっと泣き暮らしてきました。未亡人となった女たちは皆、心の傷を抱えています。でもお気づきでしょうが、わたしたちの誰一人、乞食をしていません。職場まで毎日35キロの道のりを歩いても、人にものを乞うことはしたことはありません」

*シーク教徒の男性はシング(ライオン)、女性はカウル(王女)という名前を持つ場合が多い。

祖父は目を閉じ、右を下にして横になっている。眠れない。
次の瞬間、目をあけてわれわれのカメラに目をやるだろう。
われわれに水を差し出し、外の天気を訊くだろう。
われわれに家を見つけるのに苦労したかと訊くだろう。いいえ、われわれは答えるだろう。
われわれに息子の、娘の、孫息子の、孫娘の、今は亡き彼らのアルバムを見せるだろう。
警察の供述調書、事件簿、新聞の記事に書かれたある夜のことを、われわれに話すだろう。
彼が最後に眠ったときのことをわれわれに話すだろう。イラム・グフラン



ティラク・ビハールの家々は、閉所恐怖症を誘発するようにぎっしりと密集している。玄関のドアはしばしば開け放たれ、われわれのような通行人が、未亡人居住区の小さな部屋の中を覗いていく。部屋の壁は薄く、剥げ落ちている。

ユガンタ*

「強制不眠症」 年配の医師が、月に一度の巡回をともにする若いボランティアたちに告げた彼女の病名だ。「十分な睡眠の記憶というトラウマによってもたらされる不眠」と医師は説明し、さらに「患者は自分が眠れないことを自覚し、夢か現実かを識別できない状態の中、呆然と取り残される」と言った。医師の発言は「強制」の部分を除けば、正しいように思われた。いや、彼女の覚醒状態は、自らの選択によるもの、29年前、最後に眠った晩のことははっきりと覚えていた。まだ若かったアビーが、虚偽と暴力の循環にとらわれた迷宮の街、コンノートプレイスに発つときに、彼女のところにあいさつに来た前の晩のことだ。アビーが生まれて2ヶ月の頃に耳にした話の断片を除けば、以前のことで覚えていることはほとんどない。今、彼女は未来の記憶のみを思い返す。過去の記憶とは違い、夜眠れる人には思い返すことのできない記憶だ。未来の記憶では、アビーとウツラが仕事から家に帰り、お茶を飲みながら一緒にすわり、その日の出来事を語り合う。特に変わったことがなくとも、彼女は話を最後までするよう言うのだった。未亡人居住区の他の女たちは、彼女の状態をスプドラの呪いだと言って済ませているが、心優しい者は、彼女の負っている重責のせいだとつぶやき、ときに「彼女」の重責は「わたしたち」の重責となった。その他の者は、どちらとも思っていないように見えた。これは呪いなんかではない。耳にした話と誰かの記憶半々によってもたらされたものだ。もしこれが呪いというなら、彼女だけのものではない、「わたしたち皆の呪い」だ。なぜならスプドラは、この覚醒が未亡人全員を襲っていることを、十分に知っているからだ。

ローレンス・リャン *「世紀の終わり」を意味する言葉。

october 2009



換気のない部屋に詰め込まれていないときは、この子どもたちは外の公園で遊んで過ごす。

ティラク・ビハール居住区。小さかった頃はまだ我慢ができた。2歳から13歳までの、5人の孤児の家族。6年間、わたしは毎月の月初めに1ヶ月分の配給食料を買い出しに行った。服や靴は生存者がやっている道端の貧しい店やリキシャーの小さな金物屋で求めた。ティル・ニシカーム(1984年に設立された被害者救済組織)が、彼らに外国人の後援者を見つけてきた。ガムリ村のラウエル・カウルのテイラーショップは繁盛していた。彼女は夫と十代の息子二人が目の前で焼き殺されるのを見た。こういう人はたくさんいる。。。何十年もたった今、バイパスは通ったが、わたしは訪ねていく勇気がない。結局のところ、わたしはフルカ氏*ではないから。それでも涙が乾くことはない。アルパナ・コール

*H.S.フルカ:1984年の被害者のために闘ってきた弁護士、活動家



ティラク・ビハールの西デリー居住区に住んでいる、1984年の被害者の孫たち。この子供たちは虐殺を知らないが、その影響下で生きている。

わたしは1984年のあのとき、たまたまカシミールにいた。カシミールは静かだった。だからシーク虐殺に直接出会ってはいない。恐ろしい日々の現実を身にしみて感じたのは、1990年にチャンドニチョークのグルードワラ・シースガンジ(シーク教徒が礼拝する場所)で、シークたちと地域のプロジェクトをやったときのこと。カシミールから、カシミール・バラモンの集団大移動が起きたときのことだ。しかしながらバラモンが追い出されるのは、初めてのことでなかった。歴史を見れば、17世紀に君主アウラングゼーブがムガル帝国を支配していたとき、カシミール・バラモンの極度の苦境から、1675年5月、バラモン・キルパ・ラムに率いられた派遣団をアナンドプール・サヒブへ送らざるを得なくなった。グルのティシ・バハドールとその息子、ゴービン・シングに助けを求めている。1990年以降のカシミール集団移民者が、1984年のグルードワラ・シースガンジの犠牲者との連帯をあらわしてわたしたちと結びついたのは、グルのティシ・バハドールが犠牲をいとわず、カシミール・バラモンを救ったその出来事のためだった。なぜシースガンジなのか。それはムガルの殺戮者たちが切り落とした偉大なるグルの頭部が、そこに埋められていたからだ。頭以外の部分は、ニューデリーの中央事務局の近くのグルードワラ・ルカブガンジに埋葬された。敬意を表すため、わたしたちはデリーの街を通過してグルードワラまで、カシミール・バラモン500人の拇印を押した長い巻物をもって行進した。またサティサル泉(ジェラム)から、1984年の虐殺の被災者たちの傷を洗うための水を運んだ。晩年キルパ・シングと呼ばれたバラモン・キルパ・ラムは、最終的にシーク伝道者となった。グルードワラ・シースガンジでのその日、グル・ティシ・バハドールを哀悼したとき、わたしたちの目には涙があふれた。ヴィール・ムンシ



ティラク・ビハールの未亡人居住区

KODAK 400TX

42

KODAK 400TX

43

KODAK 400TX

44

KODAK 400TX



45

KODAK 400TX

46

KODAK 400TX

47

KODAK 400TX

48

KODAK 400TX



49

50

KODAK 400TX

51

KODAK 400TX

52

KODAK 400TX

53



KODAK 400TX

53

KODAK 400TX

54

KODAK 400TX

55

KODAK 400TX



10

11

12

二十代のある男性と知り合いでした、1984年11月のことです。背が高く、大股でゆったり歩き、一語一語跳ねるように発音し、完璧に整った長い文をしゃべりました。医者になる勉強をしていて、医大で最終学年を過ごしていました。僕は当時の知り合いの中で、もっとも知性のある人だと思いました。僕は16歳、感じやすい年頃でした。

自分が16歳であるとき、25歳や27歳の人というのは、かなりの大人に見えます。二十代の男性がもつ自信を、十代では見つけることはできません。この写真を見ると、彼には自信があり、自分にはないのがわかります。

僕は彼を崇拜していました。彼は、当時の僕のガールフレンドの兄さんでした。D.D.コーサンビーの本を読むようにと、僕にくれたのを覚えています。またときどき、僕とガールフレンドをジャハンパナの森に、鳥の観察旅行に(彼は鳥好きだったので)連れていってくれました。森の中で音をたてない方法や、16歳には大きすぎる問題の語り方を教えてくれました。彼は一つの宇宙を僕にくれたのです。

1984年11月、彼は妹と未亡人の母親と三人で、オールド・ラジダー・ナガーにある僕の家に数日滞在するためにやって来ました。インディラ・ガンディーが殺された後のことです。彼らはシーク教徒でした。僕は、好きだった当時のガールフレンドも、その兄も、暴徒のために失いたくありませんでした。学校からの帰り道に、暴徒の一人がシーク教徒の男をつかまえて、ターバンを剥ぎ取り、ゴムタイヤをからだにはめて火を放つのを目撃しました。警官が一人、これをじっと見ていました。その日以来、僕は制服を着た人間をいっさい信用しなくなりました。

まだ髭を剃り始めたばかりの僕が、彼の立派なあご髭を剃りました。そうすれば道で、シーク教徒と思われないからです。彼はたくさんのことを僕に教えてくれましたが、僕も彼に髭の剃り方を教えました。うちの洗面所の白いタイルの床には、黒い毛の束が落ちました。彼の容貌が変わりました。顔が小さくなりました。かなり小さく。彼が別人になったのを確認しました。鏡の中で自分のむきだしの顔を見て、彼は目を曇らせました。

その日何かが大きく変わってしまいました。僕は成長しました。彼は二度と手にできないものを失いました。数年かけて少しずつ、最終的に彼は、11月の髭剃り前に知っていた人とは別人になりました。彼は医大を退学し、世捨て人になりました。本を読むのをやめ、バードウォッチングをやめ、僕や自分の妹に話しかけるのをやめ、あらゆることに敵意をもち、なんでも疑うようになりました。

数年前のこと、小さな新聞記事で、一人の男が死んでから数ヶ月たって発見されたことを知りました。その男は一人で施錠した家に住んでおり、あきらかに食べることを拒否していました。よその国に住む友だちの一人が、真夜中に電話してきて、僕が疑っていたことが真実だと話しました。死んだ男は、僕に解剖図を見せてくれ、トーマス・ハーディを読んできかせ、鳥の鳴き声を録音してくれたその人でした。

僕にとって、彼は1984年の最後の被害者です。そして、この街を僕は絶対に許しません。 シュダーブルタ・セングプタ

ニューデリー、ガーヒ

ハーブリート・シング 28歳

家族はナンド・ナガーに住んでいた。そこで父は暴徒に殺され、彼自身は火の中に投げ込まれた。手と足に火傷を負う。

学歴:文学士過程の2年目で退学

職業:現在無職

インデルジート・シング 21歳

ビノッド・ナガーに居住していた。父親は襲われて逃げ、近くのハイウェイで殺された。三人兄弟の末っ子インデルジートが母親の腕から連れ去られ、置きざりにされたのは生後11ヶ月だった。その三日後に発見された。

学歴:10年生

職業:スクールバス運転手

グルブリート・シング 24歳

インデルジートの次兄

学歴:10年生

職業:スクールバス運転手

ガーバクシュ・シング 27歳

インデルジートの長兄

学歴:12年生

職業:スクールバス運転手

ラチュバル・シング 20歳

暴動の半年後に生まれる。家族はシャカプールに住んでいた。ラチュバル・シングは、父親とその兄弟二人、祖父が殺されたと言われた。ラチュバルの家で親戚の集まりがあり、この四人が最初に襲われた。暴徒たちは、ラチュバルの家族がインディラ・ガンディーの暗殺を祝っていると行って、襲ってきた。

学歴:文学士取得中

ビクラムジート・シング 26歳

家族はアジト・ナガーに住んでいた。祖父が襲われ殺された。父が助けようとしたところ、火を放たれ焼死。

学歴:大卒

職業:二、三ヶ月間コールセンターで働いていたが、母親が麻痺の発作に襲われ職場を離れる。

アプタル・シング 25歳

家族はトリロクプリの13区に住んでいた。父と叔父は首にタイヤを掛けられ、火を放たれた。

学歴:9年生

職業:運転手

マンジト・シング 20歳

事件当時生後一ヶ月だった。家族がどこに住んでいたか知らない。父親の運転する三輪タクシーで走行中、家族の7人が殺されたと言われた。

学歴:9年生

職業:運転手。母親は脳腫瘍になり、NDMC(ニューデリーの自治体)の4級の仕事を休職中。

サラブジト・シング 27歳

家族はアタム・ナガーに住んでいた。父親は暴徒に殺された。

学歴:9年生

職業:グル・ハルキシェン公立校をやめさせられてから、三年間無職。ハージンダー・シング・カンナ(マルビヤ・ナガーの議員)は彼に、1984年の虐殺をいつまで訴えつづけるつもりかと訊いてきた。

ラジンデル・シング 24歳

家族はマルカガンジに住んでいた。母親が当時のことを話すのを拒むのはなぜか、理由がわからない。

学歴:10年生

職業:運転手



……たった一つの扉が、ためらい、衝動、尊敬、欲望、無事、歓迎、嫌悪、撤退や恐れを表すことがある。人が開けたり閉めたりするあらゆる扉というものが、一生の物語を語る。安全か危険かを知らせる身振りは、生命の深いところに根ざしている。

ランビル・カネカ：ガストン・バシュラール 著「Poetics of Space(宇宙の詩学)」からの抜粋

1947年(インドとパキスタンが分離独立した年)。父は12歳だった。シークのゆるいズボンをはいた、それほど幼いとは言えない年で、手紙の山の中をあさり、住所も定かでない父からの手紙(まだ出来たての国境を越えてくる)を探していた。手紙はそこにあるはずだったが、見つけることができなかった。

その後。わたしはアラジンのランプの魔神となる。アナーカリ、ダーヤガンジ、セントラル・ビスタ・メス、ジョードブル、シカンダラバード、ジャーマー・マスジド、サリータ・ビハールと、父が彷徨った街を道から道へと探しまわる。

そしてわたしはこの完璧な街を入念につくり、それをもって飛んで帰るだろう

手のひらに落ちないように乗せて

そして言うのだ、ランプから解放してくれと。わたしは記憶にないことを記憶している。

でもわたしはすでに知っている、願いはかなわないと。

記憶はもつれた糸の束にすぎない

もつれを解くために腰を落とすことはできた。でも忘却は

パリンプセスト(別の内容を上書きした羊皮紙の写本)

そこでは皮の破片がくつつきあっている。

父の目の中のわたしの顔のように

わたしの顔の内の父の目のように。パロミタ・ボーラー



サージト・シング(34)は言う。「はっきりと覚えています。インディラ・ガンディーがテレビの中で焼かれていたとき、わたしの父も焼かれていました。怒る暴徒に火を放たれて。父は、居住区の困っている人たちに、自分の古い服をあげていました。父を殺した暴徒の一人は、昔父が着ていた服を着ていました」サージトは、長い間、遠くで騒音があると、すくみあがったと言う。娘のマヒマ・シング(4)が彼のひざで遊ぶ。サージトはこう付け加える。「小さなタクシー会社をやっている、お金があるわけじゃない。でも娘の子ども時代は、絶対にわたしのものより幸せなものにするつもりです」

*Ranj se khoogar hua insaan to mit jaata hai ranj
mushkilein mujh par padin itni ki aasaan ho gayin*

悲しみに慣れると、悲しみは消える

あまりに多くの災難に襲われたから楽になった

*Yoon hi gar rota raha Ghalib to aye ahl-e jahaan
dekhna in bastiyon ko tum ki veeraan ho gayin*

あー、世界の人々よ、もしガリーブが泣き続けていたら

ここの町がどれだけみじめなものになるか見てほしい。

ガリーブ(ムガル帝国時代のウルドゥ及びペルシア語の詩人)の詩 **サリーム・キドワイ**

october 2009



1984年10月1日生まれ。マジト・シングは、マンゴールプリの家で、父と祖父と三人の叔父が焼き殺されたとき、生まれて一ヶ月だった。誰の屍体も見つからなかった。運命はさらに無慈悲な一撃を与えた。母が脳腫瘍で死んだのだ。「9年生で学校はやめた。家のために稼ぎが必要だったから」 スクールバスの運転手の仕事を得た。今はニューデリーで家族と暮らし、運転手をやっている。「家族の惨事を忘れさせてくれるものはない」と彼は言う。それでもマジトは先に進むことを学んだ。1984年の被害者仲間、助け合い慰め合う頼りの源になっている。

未亡人居住区の子どもたち

ロラン・バルトは、われわれは写真を「純化し、哀れに見せ、正当化」するために、キャプションをつけると言った。新種のおもちゃを手にした好奇心いっぱいの二人の子に、キャプションがいるだろうか？ 何か納得のいく説明があるのか。

アウトルック(2009年10月号)に書かれた、事務的なキャプションは、ブレヒトの詩みみたいなものだ。

[西デリーのティラク・ビハールは、'84年の生存者が住む場所を与えられたとき、あまり嬉しくない名前を得た。未亡人居住区。換気のない部屋に詰め込まれていないとき、この子どもたちは外の空き地で一日を過ごす。マルキット・シング(左)は、しかしながら、家にいることを許された。「次の世代の者たちが知ることは大切です」 マルキットの祖母バグィ・カウルは、惨事について語った。用水路で夫の屍体を見つけたときのこと、テレビ用ダンボールの中に、兄の頭部が置かれ、ナイフが刺さっていたこと。]

200字余りのキャプションには、感情を揺さぶる引き金になる五つの言葉がある。1984年。惨事。生存者。未亡人。子ども。もしわたしがこの写真のもつ不穏な背景を知らなかったなら、もう一つの目をあなたに向けている兄と弟の二つの顔を楽しんで見たかもしれない。

子どもらを遊ばせよ。彼らも生存者だ。いつかそれを知るだろう。アマルジト・チャンダン



西デリーのティラク・ビハールは、'84年の生存者が住む場所を与えられたとき、あまり嬉しくない名前を得た。未亡人居住区。換気のない部屋に詰め込まれていないとき、この子どもたちは外の空き地で一日を過ごす。マルキット・シング(左)は、しかしながら、家にいることを許された。「次の世代の者たちが知ることは大切です」 マルキットの祖母バグギ・カウルは、惨事について語った。用水路で夫の屍体を見つけたときのこと、テレビ用ダンボールの中に、兄の頭部が置かれ、ナイフが刺さっていたこと。

わたしはトラルという名の小さな町に生まれました。そこにはまだかなりのシーク教徒が住んでいました。でもわたしはシークが一軒しかない、ビベハラに家族に養子にいました。チャター・シングは独身の男で、母親とジェラム川の岸に住んでいました。彼の家は、学校の途中にありました。想像するに、チャターは男の子が好きだったのだと思います。当時まだグールドワラ(礼拝所)はありませんでした。現在は、ビベハラの町に入るとき、ハイウェイに大きなグールドワラがありますが、シークの人は住んでいません。でも覚えているのは、学校の帰り道に、友だちと毎日チャター・シングの家の前を通ったこと、寒い日に、彼が枝からもいだ小さなりんごをくれたこと。彼は忘れがたい、心に残る笑顔の持ち主でした。痩せてはいましたが、活きみなぎる体躯の男でした。チャターは80代でなくなりました。

クルディープ・シングはよその村の役人の息子で、わたしは子ども時代、わんぱくな子どもでした。そう、そのとき8年生でした。ある日、彼はわたしを学校のトイレに連れていきました。なんと懐かしくも愛おしい思い出。わたしの小さな起立したものが学校じゅうの目にさらされました。なんでそんなことになったか、わたしにはわかりません。でもとても恥ずかしかった。そのせいで学校じゅうの生徒や先生が、わたしに触ったり、からかったりしました。

クルディープの父親が転任してから、彼に会ったことはありませんが、どうして薄くひげの生えた優しい顔を忘れることができましょう。彼がわたしを求めてくれたこともです。彼はなぜ、わたしがいやだと言わないと知っていたのでしょうか。

以来、シーク教徒に会うことはめったにありませんでしたが、80年代にチャティシングポーラであった職場の同僚の結婚式に出席しました。それは冬のことで、その同僚がチキンとラムをどんな風に料理したか覚えています。素晴らしい時を過ごしました。1984年のデリーの暴動はカシミール社会には大きな影響を与えませんでしたし、シーク教徒たちを敵視する者もいませんでした。それはシークはインドのものだからです。でも会社の社員食堂の責任者チャンバー・シングは、ギャーニー・ジャイル・シング大統領についてのジョークを飛ばしていました。

1992年にデリーにやって来て、シェバ・チャッチに会うと、彼女はすぐにカシミールにはインデルという発音の名はないでしょうと指摘しました。そして何故わたしはそうなのか、と。

確かに、カシミールにはインデルという名はありません。ヤンデル(おそらくヤントラから来ている)ならあります。インデルはパンジャブのものです。

のちにシェバは、シークではない者(名前は忘れた)がデリーの暴動のあとすぐ、大胆にもシーク教徒であるかのように振る舞ったことを告げました。その人はバグリ(ターバン)にひげを蓄えて登場し、デリーを一日歩きまわりました。

しかし彼はシークの格好で、道でたばこを吸い始め、シャバの父がそれをとがめた、と彼女は言いました。

これについて他の人がどう思うかわかりませんが、シェバが彼女の家でわたしに語ったことは忘れることができせん。

わたしは、あなた(ガウリ)がメールで送ってくれた写真を今こうして見えています。その写真について、わたしは書きましょう。

男の子の目はあまりに無垢で、わたしは写真の中に入りこんで、この子のための、小さな詩をうしろの壁に書きたい気持ちです。

そうですね、この子のために、壁におかしなおもちゃの絵を描いてもいい。この子がそれを見て笑ってしまうようなものを。インデル・サリム



バグィ・カウルの家の壁は、孫たちの落書きでいっぱいだ。

october 2009

1984年、わたしはまだ学生でした。わたしの家は、サハーランプルにありました。ガンディー首相の暗殺につづく破壊行動は、暴徒たちの暴力との最初の出会いになりました。大虐殺の重大性とその余波については、主としてメディアを通して知りました。テレビの演説で、ラジーヴ・ガンディーが「大きな木が倒れるとき、この地は揺れる」と言ったことを覚えています。

ソニア・クラナ

*ラジーヴ・ガンディー：インディラ・ガンディーの息子で、母の死後、首相となる。



壁いっぱいのいたずら書きは、近くに掛けられたカウルの夫と息子の写真と対照を成している。

トリロクプリの池(1984年)

いつ、あなたはトリロクプリ区の池を
ただよい、浮遊し、水中に沈んでいく
死者を清めるのか。
腐臭は七つの海をわたり
わたしの魂をさがし
そこをトリロクプリの池に変える。

この池は記憶する老者。
信仰をもつ人々が
儀式や魔術や呪文をこの水で
おこない
つづく者なく死んだ
神や女神をここに沈めた。
日々の仕事をする人々が
ここで立ちどまり
一口、二口と水を飲み、立ち去った。

84年11月の金曜日
何が起きたのかと降りてきたインディラの神が
恥ずかしさのために池で溺れた。
するとシバ神が舞い降りてきた。
シバはパーバティの手を離し
激しいタンダヴァの踊りに入っていった。
聖なるガンジスが彼の頭を流し去り
この池にたどりついた。
川は息詰まった。
わたしの心で死に絶えた
信仰心のように。

いつ、彼らはトリロクプリの池を
清めるのか。
内なる魂を癒すのはむずかしい
あなたが自分のいる世界と直面すること以上に。アジメル・ロード

(パンジャブ語原典からガウリ・ギルが翻訳、リーラ、1999年)



53歳のバグギは'84年に夫を失い、3年後には、息子が鎮痛剤の過剰摂取による自殺をした。



ガンガ・カウル、息子のラマンディーブと。ガンガの母親アタ・カウルは夫、義理の弟、四人の甥をなくした。母親は五人の暴徒について供述をした。ガンガは言う。「11月が来るたびに、わたしたちは思い出します。この出来事の記憶は、わたしたちが死なない限り消えません。叔父のダルシャン・シングは僧侶でしたが、アイロン台に固定され、棍棒で殴り殺されました。叔父がのたうちまわると、暴徒たちは『ほら見ろ、踊ってるぞ』と言いました。彼らは近所の人たちを脅して、わたしたちがシークであることを言わせました。シークを教える、そうでないとおまえを殺す、と言われたのです。警察はわたしたちに家の中にいるよう言いました。警察がわたしたちを殺したのです。タクリ・カウルという女性が、逃げまどう中、子を産んだことを覚えています」



ゴピ・カウルはサッジャン・クマルについての証言をした。スルタンプリの自宅の前で、警官をうしろに引き連れて、暴徒の先頭にいるところを見たのだ。「彼がわたしたちの家の前を通っていくとき、わたしたちは叫びました。わたしたちを助けてください、と。わたしたちが恐怖におちいつているとき、彼は暴徒たちに殺せ、と言いました」 ゴピの夫は殺された。息子たちは、ひげを剃ってベッドの下に隠れた。そののち、ゴピが言うことには、「わたしはバスの乗り方も知りませんでした。町から出たこともありません。カイラッシュ・ナガーで水の運搬の仕事をやられました。最初に弟が、次に息子が取り下げを願い出てくれました。ダーヤガンジに着くまでのバスの中で、わたしはいつも泣き明かしていました」

父の晩年

病を得た父の

沐浴の世話

を村の泉で

するのがわたしの役目だった。洗って

いる

途中でとつぜん父が言った

アルパスンキー、それ

はサンスクリットで
おしっこのこと、父とわたしは
歩いて泉から少しはなれた
ところまでいく。

アルパスンキーをする。

父とわたしは泉にもどり

父の父

その

柔らかくなった父

がわたしに訊いた、おまえはそこを

沐浴のあとで洗うのか？

そしてやってみせた

どうやって包皮を

元にもどすか。ヴィヴェック・ナラヤナン

october 2009



アジト・シング(現在70歳)は、インディラ・ガンディーが暗殺されたとき、ポーカーをやっていた。次の朝、自分の家に火が放たれたことに気づいて起きた。「火の粉があがる中、人々が石を投げ込んでいた」と言う。今は孫息子(写真右)らと殺風景な二部屋の家に住んでいる。そしてこう問いかける。「わたしたちはインド国民ではないのか。なぜ裁判をしてもらえないのか」



ティラク・ビハールから来た子どもたちが、グル・ハークリシャン・パブリック・スクールで学んでいる。先生たちが言うには、自分の家の近くでは教材が足りないため、学ぶことが難しくなっているせいではないか、と。



september 2014

グル・ゴービンド・シング(シークの十代目グル)の記念日に、グルプリートはアナンドプール・サヒブで夫と過ごした日々を思い出す。ニーハング(シーク軍人)たちによって繰り出される戦闘劇、剣術や馬術、美しい男の子たちによるガッカ(シークの武術)。ニーハング・シング(グルの軍隊、兵)たちのたっぷりしたカシェラ(下穿き)は、グルプリートの笑いをいつも誘う。グルプリートはどこかのダルバル(寺院)で、キルタン(コール&レスポンスによるインドの伝統的な詠唱)に参加するのを楽しみにしてきた。前や後ろを振り返り、近しい自分の男の姿を追う胸のときめき。今グルプリートは、娘が亡き父からもらった地図帳から、様々な国の形や国旗を書き写すのを見つめる。ラシュミ・カレカ



october 2009

ガーマート・カウル(左)は夫のギャン・シングを1984年11月5日になくした。隠れていたドルガ・プリ・グールドワラを夫が出ていったときのことを思い出し、声をつまらせる。「家がどうなっているか見に行ったとき、夫は裸足だったのを覚えています。もう暴動は終わったと思ったのです。次に見たものは、夫の屍でした」のちに賠償金としてもらった700,000ルピーは、ガーマートにとって夫の死に見合うものではなく、その後の生活を耐えがたいものにした。

KODAK 100TMX

42

KODAK 100TMX

43

KODAK 100TMX

44

KODAK 100TMX



2

3

45



KODAK 100TMX

47



KODAK 100TMX

48

KODAK

4

5

6

100TMX

49

KODAK 100TMX

50

KODAK 100TMX

51

KODAK 100TMX

52



KODAK 100TMX

53

KODAK 100TMX

54

KODAK 100TMX

55

KODAK 100TMX



10

11

12

ドウパタ(スカーフ)で頭もからだもおおわれている。花模様のたっぷりしたカーテンが半分閉められ、深い闇が彼女を包みこもうとしている。その背後には分厚い木の扉があり、ガラス部分は黒く塗られている、世界を追いやるために。この名前のない女性は、光と闇の間にある扉の前に立っている。手を伸ばせばすぐ届く外の世界は、光と外気に満ちた大きな空間。女性は外を見ているのではなく、自分の内を見ているのだ、深く暗い穴を。影のみの世界。

頭を傾げる仕草にあきらめが見えるが、それだけではないものがある。1984年のあの寒かった日、狂気に満ちた恐ろしい出来事より、温かなラザイ(キルト)をかけて他愛ないお喋りをするのに格好の日だったのに、彼女は10人を超える家族が殺されるのを目撃した。

のちに、この女性と近隣に住む二人の女性が、インド国民会議の政治家ジャグディーシュ・タイトラーに対する宣誓供述書を提出した。最初の審問の際、彼女の弁護士が銃で撃たれた。標的はドウパタだった。いずれにしても、銃は発射された。それで彼女はその件から身を引いた。25年後の2009年、CBI(インドの中央捜査局)はタイトラーを無罪放免にする。彼女はすでにこの件について関心を失っていた。タイトラーが誰だったかさえ、覚えていなかった。「殺人者が誰なのか、どうしてわたしが知っていきましょう。暴力が残したものは無感覚です」

かすかに傾げた頭が軽蔑をあらわし、半ば上げた肩が忘れたという彼女の言説を裏切っている。ミーナル・バガイ

アンダルシアの十一の星

8. ああ、水よ、わたしのギターの弦になってくれ

ああ、水よ、わたしのギターの弦になってくれ。征服者がやってきた
そして以前の征服者は去った。鏡を見て自分の顔を
思い出すのは困難だ。水よ、わたしの記憶になってくれ、わたしがなくしたものを見せてくれ。
出国のあと、わたしは誰になる？ 自分の名を記した
岩がある。丘の上から、ずっと前になくしたの見える
七百年の時の流れがわたしを城壁の向こうへと連れ出す
むなしく、時がわたしを、わたしや他の者の流浪を生み出したその瞬間から、救おうとする
わたしのギターの、ああ、水よ、弦になっておくれ。征服者がやってきた。
そして以前の征服者は去った、南に向かって、めくるめく変わる
ゴミの山のような日々を修復しながら。昨日、わたしが誰だったか知っているが、
コロンブスの大西洋の旗のもと、明日わたしは誰になるのか。弦になっておくれ、
わたしのギターの弦に、ああ、水よ！ エジプトにMisr(「エジプト」を表すローマ字)はない、
フェズ(アラビア語ではFas)にフェズはない、そしてシリアは去っていった。わたしの国の旗に
ハヤブサはいない、モンゴルの足の速い馬に包囲されたヤシの森の東に川はない。
アンダルシアのどこでわたしは終わればいいのか？ ここか、あそこか？
わたしは自分が惨死したと知るだろう、そしてここ、わたしが発った場所が
わたしにとって最良だと。つまりわたしの過去だ。何も残らない、ギターだけがある。
だから弦にわたしのギターになっておくれ、ああ、水よ。以前の征服者は去った
新しい征服者がやってきた。

フェズ(Fez):アラビア語をローマ字表記したFasは「斧」の意味ももつ
マフムード・ダルウィーシュ(パレスチナの詩人)による詩、アガ・シャヒド・アリ(及びアヘメッ
ド・ダラル)英訳
アニタ・デューブ



写真の女性は、1984年の殺戮現場でジャグディーシュ・タイトラーを目撃した者の一人である。彼女は目の前で、10人を超える家族が殺されるのを見た。息子は近所の人に助けられ、孫たちは近くの家で隠れていて生き延びた。この女性は、タイトラーを告発した宣誓供述書を提出した、その地域の三人の女性のうちの一人である。最初の審問のとき、彼女を狙った銃弾に弁護士が撃たれた。彼女はこの件から身を引いた。最近、年のせいで記憶が薄れた。あるいは忘れたふりをしているのかもしれない。彼女は言う、タイトラーが誰かさえ覚えていないのだ、と。「殺人者が誰なのか、どうしてわたしが知っていきましょう。暴力が残したものは無感覚です」

トリロクプリの有権者リスト。いまならインターネットで人々の名前を引き出すことができる。整然としたマス目の中に名前が並んでいる。サンジェイ、ダラム・ヴィールの息子。グラボ、夫の名はキルパル・シング。1984年、何者かがこのリストを手に入れ、コピー、あるいはガリ版刷りをつくった。そして機械の前で仕上がりを待った。この者はクリアな写しが必要だった。重要な書類だったから。インクが使用され、それからチョークが必要とされた。シークの家「S」の字を記すために。

1984年を生き延びた人がいれば、忘れることはできないはず。わたしたち兄弟や家族はドアにチョークでSと記される必要のない家にいた。安全な家だ。シークではない人が住んでいた家。シークには「S」を、それ以外の人には安全を保障する見えない「S」を。一晩じゅう、彼らはわたしたちに新たなアルファベットをつけつづけた。パンジャブ分割のときのやり方から、クリスタル・ナハト(水晶の夜:1938年の反ユダヤ主義暴動)から、その他の何千にもおよぶ大虐殺から借用した方法で。

彼らは大虐殺を発生させるだけの時間があった。チョークを買い、有識者のリストを刷り、必需品を整えるだけの時間が。32区だけで、大量のコンクリートパイプ(道を封鎖するため)、肉切り包丁、大鎌、料理庖丁、ハサミ、棍棒、なた、灯油が用意された。

この組織の注意深く仕組まれた大虐殺の成果は、屍体と血の海であり、何十年にもわたる記憶喪失と処理されないまま捨て置かれた情報である。警察はFIR(初期情報報告書)を残さなかった。

政治家にかかわる訴訟は一つも裁判にかからなかった。目撃者の供述と証言は空白のままにされ、削除された。

1984年、トリロクプリのある家に、少女がいるのが発見された。その子は「おうちにつれていって」と頼んだ。これを報告したジャーナリストによれば、少女は屍体を踏みこえてやって来て、自分の家の屍体の山の中に立ってこう言ったのだ。「おうちにつれていって」

1984年の役所の記憶は空白で、消された黒板、消去されたテープの入ったゴドレジのスチールキャビネット(誰の声も聞こえない)、感光されたフィルムの数々、誰の非難もなく、誰にも非難されていないという委員会の報告書が残るのみ。

しかしわたしたちはトリロクプリを覚えている。もう一つの歴史には、凍る白さの冬のページにどす黒い血で書かれた記憶があり、自分の家にいるのに家に帰れない少女のことが書かれている。ニランジャナ・ロイ



ナナバティ委員会の報告書に反対するシークたち(ニューデリー)

インディラ・ガンディーの暗殺のニュースを聞いたのは、クリケット場でぶらぶらしていた時だった。試合は中止された。次の日、僕らは寄宿舎の食堂で、モティ・マハルが焼け落ちたことを聞いた。モティ・マハルというのは、人気の軽食店だった。デヘラードゥーンにはシークがいっぱいいた。彼らに何が起きたか、僕らは知らなかった。その後、モティ・マハルは再開した。放火の痕跡を見て、僕らは想像力をかきたてられた。人が焼かれた臭いは、バターチキンの香りを消すほどには残っていなかった。マハムード・ファルキ



近所の人々は彼女を「笑みを絶やさない人」と言う。しかしパピ・カウルが暴れまわる暴徒から逃げるため、屍体の山の下に隠れていたことを話すとき、その目に涙があふれる。「家族11人が殺されたとき、わたしはまだ15歳でした。助かった人はいると言われたけれど、25年間待っても誰も帰ってきません」 現在パピは電源ソケットをつくる一部屋工場で働いている。「わたしは裁判と少しでもいい将来を待ちつづけて暮らしています。一人でやっていけるよう、こうして働いています」

ときに、街は人の好意を受けとり、リサイクル用ゴミ箱の中に入れ、一瞬のひるみもなくそれを「空」にしていく。サーナート・バネジー



一晩じゅう三輪タクシーを運転した朝、グルダヤル・シング(左)は、ティラク・ビハールの自宅に一度戻る。リキシャーの修理をするためだ。「84年の暴動で、父と二人の兄が殺されました。ぼくはこうして、教育もないけど、なんとか生活をやっていこうとしています」と話す。まわりの家を指しながら、グルダヤルはこんな比較を試みせる。

「列車事故にあえば、賠償金として1,500,000ルピーがもらえます。ぼくらが得たのは、今にも壊れそうなこの家だけです。僕らは何もかも失いました。家族も、お金も、持ち物も、すべてをです」

何年か前のこと、わたしは友人とテレビを見ていました。インドが第一回クリケット・ワールド・トゥエンティ20で優勝したのです。対イングランド戦でユブラージ・シンが、ワンオーバーで六つの6点打(6ラン)をあげました。ヒーローでした。カメラがユブラージを撮ろうと、チームバスに乗り込みました。ユブラージはカメラの前に立って、腰を動かしセックスの真似をはじめました。

友だちがこう言いました。「びっくりだな」

何年かたって、あの試合のユブラージのあのときの態度について知りました。あれはイングランドのキャプテン、アンドリュー・フリントと彼の間でのやり合いの余波だったのです。インタビューで、ユブラージは何を言われたのか暴露しました。

「前のオーバーで、ぼくが2バウンダリー(境界超え)を彼の投球に対して打ったあと、クタバレと言ってきた。ぼくもクタバレと言いつつ返した。すると彼が『なんだって?』と言ったので『聞こえただろうが』と返しました」

「彼が『金玉とるぞ』と言ったので、ぼくは『このバットが見えるか? これでおまえのどこを打つと思う?』」

ユブラージはこう付け加えました。

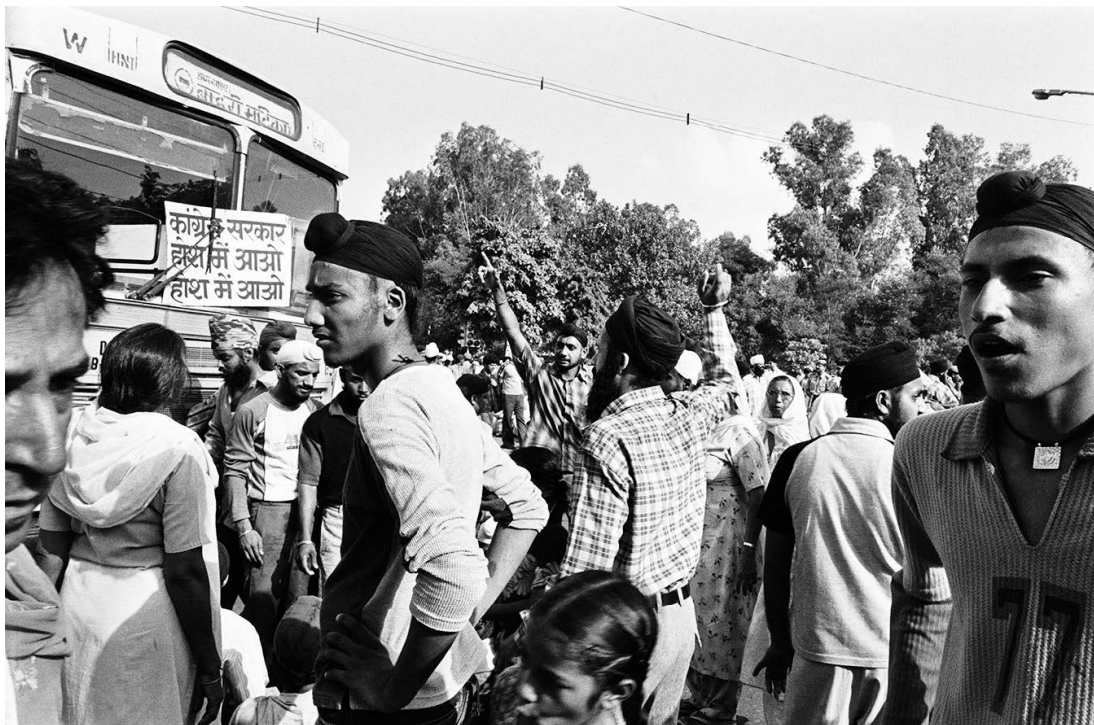
「ぼくはすごく感情的になってました。たまらなく腹がたって、グラウンドにある玉という玉を打ちたいと思った。こういう口論は有利に働くこともあれば、裏目に出ることもあるんです。でもあの日は、向こうにとって裏目に出た」

でもあの日テレビの前にいたわたしたちは、すでに見ていたわけです。わたしたちはクリケット場での<玉打ち>の激しい怒りを、そして歴史上のあらゆる傷を見たのです。ユブラージの勝利のファルス(男根)は彼一人のものではなかった。

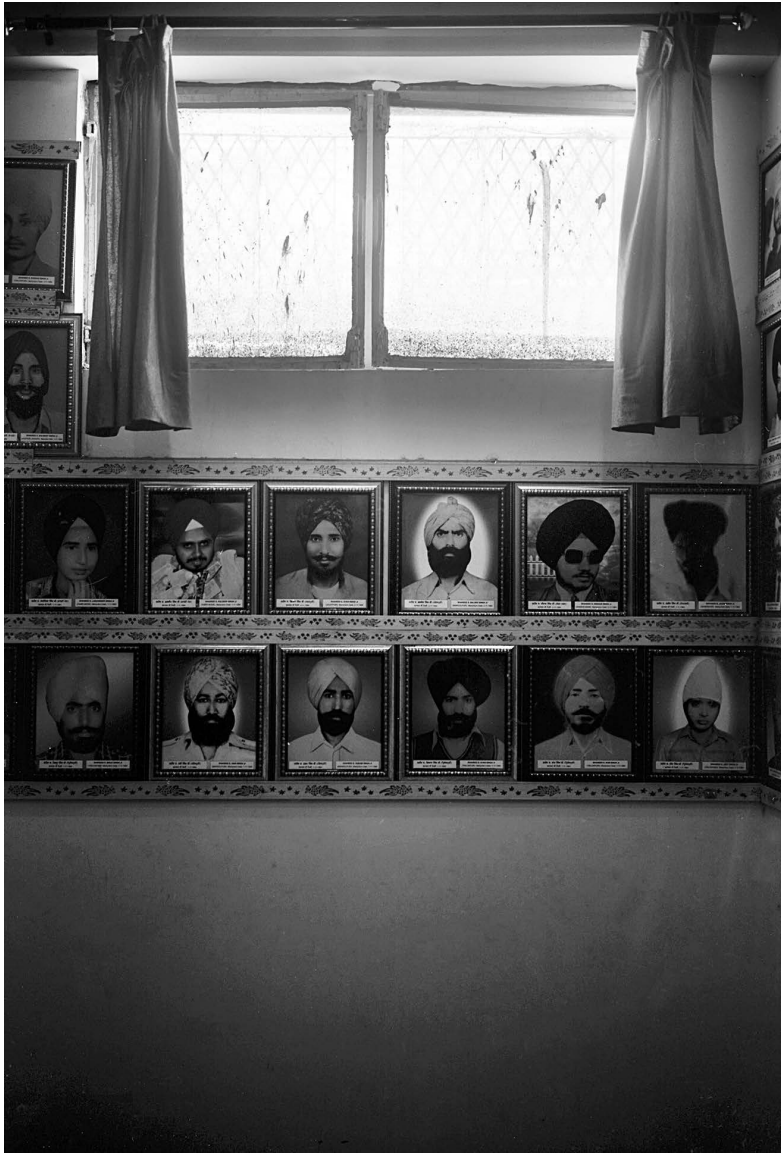
友だちが、テレビの中で腰を振る彼を指して言いました。

「今は、あれがぼくらの愛国心だよな。インドという国になんの思いもない。ぼくらの愛国心の中身は空っぽだ。あの腰ふりダンスがあるだけだ」

「あの腰ふりを欲望と勘違いするな。欲望というのは想像力の産物だ。自分本位の観念は核ミサイルと同じだ。どぎつい男性誇示に過ぎない、女たちはその被害者だ。官能もなければ、言葉もない」**ラーナ・ダスグプタ**



ナナバティ委員会の報告書に反対するシークたち(ニューデリー)



殉教記念ミュージアム(ティラク・ビハール)

モハン・シングはトリロクプリで11人の家族をなくした。「人は食べものがなかったら、生きていけません。そしてものを知らなければ、それに耐え続けることになります。外圧に乗じた見えて見ぬふりがたくさんありました。それによってわたしたちは泣く羽目になりました。指導者のすべてがこれをやりました」

「権力者たちはイシャラ(誓いを破った者に厳しい肉体的罰を与える女神)を送りこみ、灯油と武器と戦時につかわれる白い科学粉末という形の支援をしました。男たちは酒をふるまわれ、火を放つよう言われました。あちこちの倉庫が灯油と粉とナイフを取り出すために開けられました。警官が言いました。やるべきことをまずやれ。殺して、盗んで、強姦するんだ、と」

「一晩じゅう、わたしの姉たちは小さな子どもと公園にすわっていました。その子たちには、食べものも飲みものもありません。井戸の取っ手すら外しました。母親たちは自分のドウパタ(スカーフ)をつかって汚れた排水溝の水を漉して、子どもたちに飲ませました。この状態は、軍隊がやって来た三日後の午後までつづきました」

「のちに、被災者キャンプにNGOとグールドワラの人が来て助けてくれました。誠実な人たちで、同情して力を貸してくれました。服や料理道具、配給品をくれました。大学生の女の子たちがやって来て、一人一人抱きしめていき、見たことを書き留めていきました」

「マンウォーン(疲れ果てた)平原」、城郭都市の南に広がる土地をイギリス人は顔をしかめてこう呼びました。たくさんの歴史が刻まれた土地に、さらなるものをつくりたくなかったのです。ここで起きたことに憔悴していました。人間が何世紀にもわたって起こした出来事、大きなもの、小さなもの、愛あり欲あり、冷酷さと思い上がりの野望、そういうものに満ちた場所。

1984年のあの日、空に向かって、黒い煙の尖塔が上がっていたのを覚えています。向こうで恐ろしいことが起きているという、倒れこみそうな無力感。噂話。管理監視された情報。ものが燃える臭い。

このような酷い出来事をどうやって飲み込めるでしょう。どうやって先に進んだらいいでしょう？ 以前にも起きたことかもしれない。おそらく、何度も、マンウォーン平原で。しかしそれが恐ろしい組織的残虐行為を言い逃れする理由になりますか？ 大切なことは、これを絶対に忘れないことです。故人の写真やティーカップとともに、これは受け入れがたい歴史上の出来事だと脳裏に刻むことです。正常な人の生き死にではなく、莫大なる不当行為なのです。この記憶をしっかりとどめることが大事です。プラディップ・キシエン



トリロクプリ30区。ハーバジャン・カウリは4人の息子がいた。そのうちの二人、バルジット・シング(19歳、中段)とランビル・シン(12歳、上段右)は、彼女の目の前で殺された。三番目のランジト・シング(上段左)は頭を殴られ、数年後、病気を繰り返すうちに死んだ。カンワルジト・シング(4番目の息子)は家を出ており、現在アルコール中毒である。夫のソーハン・シング(中段左)は、屋根裏に隠れていて助かった。2、3年前に彼はなくなった。ハーバジャンは義理の娘と孫たち、ランビル・シング(叔父の名前をとった)とコマルジト・カウルと住んでいる。この家族は、シャヒディ・グルードワラの近くにとどまった数少ない人々。それはトリロクプリ32区にあつて、最も酷い殺戮を見守った礼拝所である。「息子たちは殺されました。警察がわたしたちにできることは何だったんでしょう。彼らはわたしたちから武器を奪い、暴徒がわたしたちを殺しました。もしわたしたちに暴徒と戦うことが許されていたら、悲しみは少しは減っていたでしょう。今になってわたしたちはどこに行くことができますか? ジェハンギープリでは、わたしたちに割り当てられた住居を不法に占拠している人がいます。ここで暮らすことは、今も殺人者たちの間を歩くことなのです。でも彼らに屈することはありません。以前にわたしの孫息子が毛髪のことではじめられましたが、手を切り落とすよと言ってやりました。二度とそんなことを口にする者はいません」

防虫剤と並ぶ遺影から、静かな現実感が伝わってくる。吊るされた服とともに、所狭しと置かれた物たち、時の流れに葬られ、ミシンの脚からは国の怠慢が染み出し、血に赤く染まる。。そんな閉じた扉の内で、どうして眠れようか。ちょうつがい泣き叫び、白い布におおわれた、この部屋で。マンミート・デヴガン



タランジート・カウルの祖父ジーヴァン・シングは、1984年11月1日に殺された。

october 2009

重いカーテンが心配げな手つきで押し開かれ
わびしい通りをそっと覗く
レンガをもつ手がすぐそこにあり
幻の町の風景を切り裂く

銀色の亡霊が
酸っぱいグロッグ酒から浮かび上がるが
あからさまな嘘のようにもろい
そして裏切られた過去を手におさめる
それはどこに向かい、どこから来たのか
歴史の中のしなびた時代
落ち窪んだ目を思い出し、そっと
それを漂わせることなく、虚空に据える

少しずつ、彼女は、時の流れによって
伸ばした四肢をかりたて
苦痛に耐えながら、密かな逢瀬の物語を
毎日ともに目覚める虚空のことを、語る
そして皮膚をとおってからだの中で響きわたる
笑い声を聞きたいと願う。グルヴィンダー・シング



「1984年の未亡人」の一人が、自分に起きたことを話す。匿名であることを望んだ。

october 2009

教訓

1998年、ラジパット・ナガー、ジャングプラにて

「どんな風にあのクソツアレどもをやっつけたか、教えてやろう。やつらがヌンドラカンジー（インディラ・ガンディー）を殺したあとのことだ。一人残らずサダール（シーク教徒）のクソ野郎どもを見つけることができた。今じゃあいつらは偉そうにその辺を歩きまわっているが、俺たちは84年に教えてやった。店に押し入り、あいつらの家に押し入り、隠れているやつらを見つけ出した。食料貯蔵庫から、戸棚から、出納簿をしまいこんでいる屋根裏から引きずり出して、チャツネにしてやった。クソ野郎めが」 そう言ったのは50代後半の痩せて小さな栄養不良の男。汗臭く、白髪頭の、ネズミを思わせる容姿。その小さな男がわたしを乗せて、自転車タクシーのペダルをこぐ姿は驚きだった。彼は記憶をたどるうちに、興奮をかきたてられたようだった。わたしをジャングプラ・エクステンションからラジパット・ナガー市場まで運ぶあいだに、男は自動車修理工場を、小さなダバ（露店食堂）を、路地を歩く家族を指して言った。「いいかい、ここのやつらはあごひげやこんな毛を生やしてるだろう」 ペダルをこぎながら、わたしを振り返ってにやりとした。彼自身そのひげを真似て生やし、それを引っ張って頭をそらすので、向こうから来るスクーターとぶつかりそうになった。「あの2、3日のあいだは、あごひげが役に立った。あごひげと髪の毛だ。やつらのあごひげをつかんで、髪の毛を引っ張って、やつらにわからせてやった」 市場につくまでの間に、勝手な仲間意識をわたしに対してもつことで、最高の幸福感を味わっていた。わたしはサダールのようには見えないが、彼をつかまえてこう言ってやりたかった。わたしは毛を切ったサード（シーク）だ、おまえを殺してやる。でも、わたしが何をしたかといえば、7ルピーを彼に払い歩き去ることだった。

2003年、ロー・ガーデンにて

「あんたには理解できないな。あいつらは教わる必要があった、あのまんこ猿たちはな。他に方法はない、そうされるべきだった。いいかい、俺らはここ、アフマダーバードの一角全部を所有してた。誰も入ってこれない。以前は警官でさえ来れなかった。ミニ・パキスタンって呼んでたんだ。ふん、何人かは死んでパキスタンに送られたがな。十分じゃなかった。起きたことは、小さな爆竹が破裂したようなことだった。まともに受け取っていたら、もっと酷いことになってたな。俺らはもっとやつらを故郷に送るべきだったが、この土地に眠ってる」 ネズミも殺せそうになり太った男は、派手なチャパル（サンダル）の足で深い芝を踏みつけた。わたしは、刺繍をほどこした丈の長いシルクのクルタが、男の太鼓腹でパンパンに張っているのを見つめた。彼の着ているチュリダール風のパンツの縫い目が、足首のあたりでほころびているのに気づいた。ほんの1メートル先では、婚礼ラスガルバを踊っている人々がいて、若い新婚夫婦を祝っている。「エイ、ニティニヤ！ さあ、サルマン・カーンの真似ダンスをしてちょうだい。義理の母さんの前で、どう？」 隣りにいた男が、わたしの肩に手をかけチャパルを脱いで、パンツのほころびを確認しようと片足をあげた。「おやおや、これを仕立て屋にあずけなくちゃ。俺の自慢の仕立て屋はミア*だったけど、去年の暴動で逃げ出した」 この男にわたしがムスリムだ何だと言ったところで何の意味もない。彼はこの結婚で親戚になった男で、わたしが何者かちゃんと知っている。片足をおろすと、わたしの背をパンと叩いた。「あんたの愛するまんこ猿のパキスタン人でここはひどいもんだ。そうだろ。2001年のエデン・ガーデンでの国際試合以来、ずっと俺らは会ってなかった。あんたはあのとき、スタジアムにいたのかい？ ハルバジャンがオーストラリアを三振でやっつけた試合だよ」 ルシール・ジョシ

*ミア（ミアン）：ムスリムの軽蔑的な呼称



ナナバティ委員会の報告書に反対するシークたち(ニューデリー)

わたしはこの写真を途切れることなく流れ、広がっていくものとして見ている。カメラが記録した出来事があり、その内に、それを超えて、語るべきものが存在し、その話の中に映像が宿命のように埋め込まれる。これは写真のもつ、存在論的な二面性である。事件は若者たちによって起こされ、物語は、おそらく、写真家によってつくられる。一方は出来事を直接的に反映し、もう一方は自身に対して問いを発する。一つの出来事から、いかに静かな語りを生み出せるか、と。記憶の澱が突如として動き始める。。。

この写真は、頭越しの風景を最前面に展開し、それから静かに水平に伸びていく。圧倒的な頭と顔がそこにある。若い男たちが主体の集まりだ。実際、ほとんどの参加者はまだ思春期の男の子たち。柔らかな産毛だったものが、やっとな硬いあごひげとして生えはじめたばかりだ。青年たちは不安げな仮面の下に激しさを秘め、スペクタクルな活気をもたらす。彼らのドラマチックな儀式が、いやいや掲げられた非難の対象のポスターを前に、展開されようとしている。

多くの青年たちは、一人のシークを除いて、みんな額のところでしっかりとターバンの結び目をつくっている。これにより彼らは、自分たちが誰なのか、どこからやって来たのかを明白に主張している。ターバンが、彼らの存在の不安定さや周縁性を、わたしに無言で伝える。青年の群れの真ん中に、(ターバンの)結び目のない少年がいて、その者の頭には何もなく、自らの文化と関係を絶っていることを示している。彼は興奮状態の中にある。青年は何か言おうとしているが、きちんと話ができるのか、とわたしは思う。疎外された者が見せる興奮だ。わたしは、ずっと前に死んだのにいつまでも死に切れず、生と死の境界で佇んでいる親のように、その身を案じている。わたしは永遠の退陣に戸惑っているのだ。この青年たちはおそらく、両親や祖父母が建てた家を目にしたことがない。時の経過と過去の姿を閉じ込めたしわだらけの写真以外には、両親や祖父母を見たことすらないのかもしれない。

少し注意すれば、頭をおおった女が一人遠くの方に見える。そこで彼女は何をしているのか。おそらく彼女はここに不安と怒りを抱えてやって来たのだ。それから二人のきちんとターバンを巻いた老年の男が、うしろの方に見える。彼女を安心させる仲間としてやって来たのかもしれない。マダン・ゴパール・シング



ナナバティ委員会の報告書に反対するシークたち(ニューデリー)



KODAK 400TX

00 KODAK 400TX

0 KODAK 400TX

0314

2 KODAK 400



1

1A

2

ITX 3 KODAK 400TX

4 KODAK 400TX

5 KODAK 400TX

6 KODAK 400TX

7 KODAK 400



3A 3 KODAK 400TX

4A 4 KODAK 400TX

5A 5 KODAK 400TX

6A 6 KODAK 400TX

7A 7 KODAK 400

ITX 8 KODAK 400TX

9 KODAK 400TX

10 KODAK 400TX

11 KODAK 400TX

12 KODAK 400



ITX 8 KODAK 400TX

9 KODAK 400TX

10 KODAK 400TX

11 KODAK 400TX

12 KODAK 400



ITX 13 KODAK 400TX

14 KODAK 400TX

15 KODAK 400TX

16 KODAK 400TX

17 KODAK 400



ITX 18 KODAK 400TX

19 KODAK 400TX

20 KODAK 400TX

21 KODAK 400TX

22 KODAK 400



ITX 23 KODAK 400TX

24 KODAK 400TX

25 KODAK 400TX

26 KODAK 400TX

27 KODAK 400



ITX 28 KODAK 400TX

29 KODAK 400TX

30 KODAK 400TX

31 KODAK 400TX

32 KODAK 400



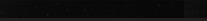
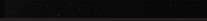
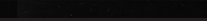
ITX 33 KODAK 400TX

34 KODAK 400TX

35 KODAK 400TX

36 KODAK 400TX

37 KODAK 400



傷をうけた魂やある集団にもたらされた精神は、内にある闇と向き合わないため、ある日ある時に起きたことを排除するという無意識の行為をとることがある。日時というのは、いわば仮の仕切りを設けることであり、その中ではこの「日と時間」が、正義を訴えたり起こったことに対して声をあげることの代わりになると、人を信じ込ませてしまう。「日と時間」というのは、カタルシスを促すかもしれないが、わたしたちに免罪符を与えもする。日と時間がなければ、生き残った人々に対して、わたしたちは今も責任があると理解せざるを得なくなる。彼らの身に降りかかったことと同様、彼らの訴訟はわれわれ自身のものなのだ。世代が死に絶え、家族の中の世代が絶え、子ども達は両親をなくした。つまり家族根こそぎ、永遠に一掃されたということ。文明国では、これを虐殺と、人間性に対する犯罪であると、民族浄化である、と言っている。インドでは、「シーク暴動の余波」と呼ばれる。それがいかに狡猾な言い方か、いかに二枚舌であるか。よくて現実を認めない社会、悪ければ復讐心に燃えた社会に今もいることの、さらなる証明を誰が必要としているだろう。

わたしたちは絶対に忘れない。家族が庇護の下にあるように、被災者はわたしたちとともにある。ザリナ・ムハメッド

うそをつく以外、矛盾を解決するのが不可能である場合、それが手段になることをわたしたちは知っている。シモーヌ・ヴェイユ(ジービシュ・バーチ訳)



ナナバティ委員会の報告書に反対するシークたち(ニューデリー)

そのからだを傷つけられた者だけが知っている

2005年にニルプリート・カウルから体験を聞くとき、精神分析医に同席してもらう必要があった。わたしたちにとって、すべてを理解するのは至難の技だった。彼女の言葉の重みをどう受け取っていいものか、わからなかった。わたしたちはニプリートにぜひとも本を書くようにと言った。いつかそうすることをわたしは望んでいる。

1984年についての沈黙があり、それは暴力を理解したり、恐怖を追体験することの不可能性からきているのかもしれない。おそらく、聞く耳持たずの沈黙が、目撃証言に対する政府の答えであり、集められた声はまったくの無駄と化している。当時は24時間のテレビ番組もなく、インターネットもソーシャルメディアもなく、わたしたちにあるのは貴重な目撃証言や覚え書き、写真だけだった。あの11月の大虐殺を撮影した写真家たちは、中央政府の権力行使によって、フォトラボから写真が消されてしまうのではと恐れていた。写真は実際に消えた。それを免れたものは今、事件の証拠として、あるいは起きたことの追体験を促すものとして使われている。活動家で弁護士のH.S.フルカによって、2012年に開かれた路上写真展では、多くの訪問者が涙を流し、自分の携帯のカメラで展示写真を撮影していた。

2005年、ナナバティ委員会報告書の裁定が出されたのちに、それから2009年にも、暴動の25周年を記すため、わたしはデリーの再移民居住区を訪ね、トリロクプリ、ティラク・ビハール、ガルヒといった地域や、街で行われた反対集会を写真に撮った。そのときの写真は、印刷媒体で発表された。

写真について言えば、すでに主要メディアで発表され、その状況の中で人に働きかけたのだから、今はある種の遺物である。そこから離れたところで、これらの写真はどう見られるだろうか。テキストの方は、1984年についての話を引き出すために、2013年の初め頃、友人アーティストたちにわたしの撮った写真にコメント書いてくれと頼んだ。彼らは1984年11月にデリーに住んでいたか、その後にあるいは以前に住んでいたか、この街を自分のものと思っている人たちだった。テキストは写真に対する直接的な記述でも、あの事件に関する自分の見方でもよかった。抽象的でも、詩的でも、個人的な感想でも、フィクションとして書いても、事実に基づいていても、「トバ・テク・シング」(1947年の分離独立の際の混乱を強烈な風刺で書いたパンジャブ出身パキスタン人作家による短編小説)の独創的な言葉のように、ナンセンスな書法でもよかった。

先月(2014年9月)、わたしはティラク・ビハールにまた行った。ダルシャン・カウルや他の未亡人証人たちと再会した。また「賑やかな」家族の子どもたちが、グル・ハークリシャン・パブリック・スクールで演技や暗唱するのを見た。殉教記念ミュージアムにも行った。入場者は、写真に写っているこの家族だけだった。

「Jis tann lāgé soee jāné」というパンジャブのことわざ。そのからだを傷つけられた者だけが知っている、という意味。しかし多分これは、直接の被害者ではないわたしたちにも向けられた言葉だ。自分の街の(そして全世界の)歴史をしっかりと形にすること。個々の人間の物語や供述、解釈や意見、秘密、写真といったものがない世界は、まさにオーウェルが描いた全体主義国家と同じ1984年だ。

2005年に撮った写真は、初出が*Tehelka* (と*Hartosh Bal*)。2009年のものは*Outlook* (と*Shreevatsa Nevatia*)。写真についているキャプションの多くは、雑誌掲載時に添えられたものである。

わたしの求めに応じてテキストを書いてくれたのは以下の人々:*Jeebesh Bagchi, Meenal Baghel, Sarnath Bannerjee, Hartosh Bal, Amarjit Chandan, Arpana Caur, Rana Dasgupta, Manmeet Devgun, Anita Dube, Mahmood Farouqui, Iram Ghufuran, Ruchir Joshi, Rashmi Kaleka, Ranbir Kaleka, Sonia Khurana, Saleem Kidwai, Pradip Kishen, Subasri Krishnan, Lawrence Liang, Zarina Muhammed, Veer Munshi, Vivek Narayanan, Monica Narula, Ajmer Rode, Anusha Rizvi, Nilanjana Roy, Inder Salim, Priya Sen, Shuddhabrata Sengupta, Ghulam Mohammed Sheikh, Nilima Sheikh, Gurvinder Singh, Jaspreet Singh, Madan Gopal Singh, Paromita Vohra*

To: *gauri.gill@gmail.com*

Subject: *1984*

日本語版について

「1984年」はインドの写真家ガウリ・ギルが制作した、1984年に起きたシーク教徒虐殺についての本です。葉っぱの坑夫は、ガウリ・ギルの許可を得て、「世界消息:そのときわたしは」のコンテンツの一つとしてこの作品を日本語訳しました。

この事件の背景については、サイトの方に簡単な説明文を置きました。

<http://www.happanokofu.org/#!3--note/zrczq>

日本ではこの30年前の事件について、今もそれほど知られていないように思います。訳者自身、この本に出会ったときは、起きたことの大半を知らない状態でした。シークの研究者シムラン・ジート・シングは、*TIME Ideas*誌(2014年10月31日)で、「これは『民族浄化』であり『虐殺』である。自然発生的、非組織的に起きたものではなく、チリヤルワンダ、南アフリカで起きたものと同じ種類の虐殺事件である」と述べています。少しずつこの事件のあらましや背景を知るうちに、その言葉は事実に近いと感じるようになりました。

訳す上で、主として訳者の無知により、さまざまな困難がありました。人の名前、土地の名前一つとっても不慣れなものが多く、1984年以前のインドの政治や社会、パンジャブ地方の置かれている状況、宗教の対立問題、さらには1947年のパキスタンとインドの分離独立やそれ以前のイギリスの統治時代の苦境など、未知のことが山ほどあり途方にくれました。しかしそれだけの困難があったとしても、訳すあいだに、少しはこの事件やインドの状況を理解できるようになったことはよかったと思っています。

シークやパンジャブやインドについて知識の深い方が読まれて、疑問に思われる点があるかもしれません。そのときは葉っぱの坑夫までお知らせいただくと大変嬉しいです。事実確認の上、改良修正していきたいと思います。

葉っぱの坑夫 大黒和恵

editor@happano.org

2015年12月4日

SHO Sharma - He had attacked
Hijra - and on his
friends had become enemy

Army had saved us.
Nahavati - give justice.

Barbhan Raur
state is silent, as if
nothing happened -
guilty have been made
children haven't ever seen
given father's love.

widow
2

Pappi Raur, 15 years old.
Police sent the mob
cut people open
sawt people alive
look how Jaddas are dancing
cut their eyes, doctor took the
eyes out

"spent 3 days, 3 nights in corpses"
torches, beautiful women.
get out of here
nobody was ready to help -
they were all ready to kill
took us into camps

family saved - with
25 yrs., nobody has come back